

[研究報告]

要介護高齢者の関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズとその支援

光来出由利子¹⁾、田場由紀¹⁾、山口初代¹⁾、砂川ゆかり¹⁾、大湾明美¹⁾

抄録

目的:本研究の目的は、要介護高齢者の関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズを明らかにし、その充足のための支援を検討することである。

方法:要介護高齢者10名に半構造化した面接調査を行った後、外出ニーズを充足する支援について、ケア担当者と老年看護の教員とのフォーカスグループインタビューにより本人の強みを活かした支援を検討した。

結果:外出ニーズは、【つながりを確かめたい】、【つながりを楽しみたい】、【つながりによる役割を果たしたい】であった。充足できない理由は【身体的な変化による活動減少】、【人的・物的環境の脆弱さ】、【個別のつながりの限界】、充足のための要望は、【外出のための具体的支援をしてほしい】、【つながりへの思いを理解して欲しい】、【つながる方法を一緒に考えて欲しい】であった。外出支援の社会資源には、内的資源としての要介護高齢者、外的資源としての非専門職(家族・親族と友人・知人)と専門職(福祉職、看護職、医師)があった。看護職の役割は、『具体策の検討』だけでなく、『つながりの糸口探し』、『外出実現に向けたニーズ共有』、『外出実現に向けた協働』、『外出意欲へのアプローチ』、『外出ニーズを活用したリハビリ支援』があった。

結論:外出支援における看護職の役割は、本人とともに『つながりの糸口探し』をしつつ、『具体策を検討』し、『外出実現に向けたニーズの共有』により、『外出実現に向けた協働』で支援をすることで、『外出意欲へのアプローチ』や『外出ニーズを活用したリハビリ支援』に活かしていくことであった。

キーワード:要介護高齢者、関係他者とのつながり、外出ニーズ、外出支援

Key words: Elderly requiring long-term care, Relations with concerned individuals, outing need, outing support

I. はじめに

サクセスフルエイジングには、「人生への積極的関与」が重要な要素とされており、その下位概念に「対人関係」の維持がある(Rowe&Kahn, 1997)。人生100年時代とされる現代社会において、家族や友人といった関係他者とのつながりは、長くなった老年期をより幸福に過ごすために保持すべき資産として着目されている(Gratton&Scott, 2016)。対人関係について、ソーシャルキャピタルの研究では、西洋的な強い自発性に基づく対人関係と、東洋的な“遠慮がちの”対人関係といった文化差による影響で特徴づけられているが、どのタイプであっても自ら主体的に関与するものであることが共通点とされている(今村, 2010)。しかし、要介護状態になると、心身機能の低下により生活範囲の縮小や外出・移動が制限されることで関係他者とのつながりが維持しづらくなる(正木ら, 2021)。要介護高齢者に対する外出支援は、社会サービスにより日常生活を営む上で最低

限必要な外出は保障されているが、関係他者とのつながりを目的とした外出は範疇外であるため、つながりを維持する機会すら失われてしまうことになる。そのため、要介護高齢者となっても、サクセスフルエイジグの実現を目指し、主体的に関係他者とのつながりを維持しながら生きることを支えるため外出について検討することは重要と考える。

要介護高齢者と外出に関する先行研究を概観すると、閉じこもり予防と公的サービスの効果検証の観点から外出が捉えられており、外出と影響因子との関連についての研究が大半を占める中、外出ニーズと外出支援に関する研究がある。外出と影響因子の研究では、慢性疼痛や歩行能力といった身体面が外出に及ぼす影響(林, 2013; 米田, 2012; 三浦, 2008)や、転倒リスクや排泄への不安が外出を抑制する心理面(金, 2003; 佐藤, 2019)、通所サービスや住宅改修といった物的環境(高橋, 2017; 横塚, 2010)に加えて、介助者への気兼ねや他者からの視線といった人的環境(望月, 2012)などの要因が複雑に外出に影響していた。このような状況にお

1) 沖縄県立看護大学

いて、要介護高齢者の外出ニーズは、外出したい思いがあっても、要介護状態により実現可能性が感じられない場合、自発的に表出されにくいものであることが報告(清水, 2019) されている。しかし、ニーズが満たされる体験を通して、外出ニーズは拡大すること(清水, 2019)、閉じこもり高齢者への調査では、馴染みの関係による外出の誘いを希望しているとの報告(森井, 2018) から、要介護高齢者の外出ニーズは、潜在化しやすいが、支援によって表出が可能と考えられる。

要介護高齢者の外出支援の研究では、訪問や通所サービスによる補助具を活用しての移動手段の獲得といった身体面(永田, 2017; 望月, 2012; 藤井, 2010) や、自信や成功体験をもたらす心理面(佐々木, 2015; 吉丸, 2008)、住宅改修による物的環境面の整備(加藤, 2008) への取り組みが報告されており、影響因子にある人的環境への支援はみられなかった。そして、外出支援の実用化のためには、個別的な介入が必要との課題(永田, 2017) が挙がっていた。また、身体機能の向上を目的とした通所型サービスによる外出支援は、友人や人との出会いに動機づけられて参加し、その後、健康や運動に対するニーズが生じること(望月, 2012) が明らかにされている。そして、要介護高齢者の外出は、介護の重度化を防止するため閉じこもり予防の観点から推進されてきたが、健康長寿に影響する社会的孤立は、他者との交流や交流頻度の関係的孤立を重視しており、外出頻度の物理的孤立を指標とする閉じこもりとは異なることが指摘され(齋藤, 2017)、社会関係から外出を捉える必要性が述べられている。

このように要介護高齢者の外出は、公的サービスで保障されている現在においても、閉じこもり予防を目的とした専門職の必要性からの外出支援だけでは十分ではなく、要介護高齢者が求める関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズに着目し、社会関係の観点から外出支援を検討することは重要と考える。

以上のことから、本研究の目的は、要介護高齢者が関係他者とのつながり維持しながら主体的に生きることを支援するために、関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズを明らかにし、その充足のための支援を検討することとする。

用語の操作的定義

- 1) 外出ニーズ：本人自身が関係他者とのつながりを目的として居住の場から外に出かけたいと思っていることを言葉によって表出したものとする。
- 2) 関係他者とのつながり：これまでの生活歴の中で関わった家族、親族、友人、知人、隣人などとの結びつきをつなぎとめる思いのこととする。

Ⅱ．方法

1. 研究デザイン

研究デザインは、質的記述的研究である。

2. 研究協力者

1) 要介護高齢者(表1)

要介護高齢者は、研究の主旨が理解でき、かつ質問内容に回答が可能な者とし、老年保健看護実習の実習先である居宅介護支援事業所および訪問看護ステーションの管理者に対し、研究の主旨を文書と口頭で説明し、該当する事例の抽出を依頼した。該当事例について4か所の訪問看護ステーションと2か所の居宅介護支援事業所の支援対象者の中から、一人暮らし要介護高齢者の紹介を受け、研究の趣旨を理解し同意の得られた者とし、一人暮らし要介護高齢者10名が研究協力者となった。一人暮らし要介護高齢者を研究協力者にする理由は、外出ニーズを把握するために家族の影響を受けにくく、かつその充足のために家族の支援が得にくいことによるものである。また、軽度の要介護状態であっても身体機能の低下により外出は影響されるため、要支援者を含めた要介護高齢者を研究協力者とする事とした。

2) 高齢者ケアの専門家

高齢者ケアの専門家は、要介護高齢者にサービスを提供しているケア担当者(看護職者、福祉職)と老年保健看護の教員とした。それぞれの事業所の管理者に紹介してもらったケア担当者8名と本学の老年保健看護の教員2名の該当者を得た。全員から同意が得られ、ケア担当者(看護職者、福祉職)8名と老年保健看護の教員2名の研究協力者が決定した。ケア担当者は、看護職7名と福祉職1名で、年齢は、30代1名、40代1名、50代5名、60代1名で、専門職歴は、15年以上40年以下であった。老年保健看護の教員は、30代が1名、50代が1名で、教育・研究歴は、2年以上20年未満であった。

3. データ収集

1) 要介護高齢者

データ収集は、半構造化した面接調査を60分程度実施した。調査項目は、関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズとして、つながりたい他者(つながりの対象)とのつながりのための外出についてやりたいこと、その理由と内容(つながりの目的)とした。

また、外出ニーズの充足できない理由、その充足のための要望を把握した。調査内容は、調査票へ記載するほか、研究協力者の了解を得て、ICレコーダーに録音、逐語録を作成した。

2) 高齢者ケアの専門家

データ収集は、事例3～4名ごとにケア担当者2～3名と老年保健看護の教員1～2名で構成する3つの専門家グループを編成し、事例ごとに支援を検討するためのフォーカスグループインタビューを実施した。討議時間は、1グループあたり90分から120分実施し、内容は、参加者全員の了解を得て、ICレコーダーに録音、逐語

表1 一人暮らし要介護高齢者の概要

事例	年齢 (代)	性別	要介護度	主要病名	一人暮らし要介護高齢者		家族構成		一人暮らしの状況	
							子の有無	子との距離	期間	きっかけ
1	70代	男性	要支援1	慢性閉塞性肺疾患			あり	近隣	10年以上	離婚
2	70代	女性	要支援2	スティフマン症候群			あり	近隣	14年	子の独立
3	70代	女性	要介護2	変形性膝関節症			なし	—	3年	配偶者の施設入所
4	70代	女生	要介護1	腰部脊柱管狭窄症			あり	近隣	約30年	子の独立
5	90代	女性	要介護2	神経因性膀胱			あり	近隣	8年	配偶者の死亡
6	70代	男性	要支援1	腰椎ヘルニア、大腸癌			あり	遠方	38年	離婚
7	70代	男性	要介護2	後縦靱帯骨化症			なし	—	41年	実家からの独立
8	80代	女性	要介護1	腰椎圧迫骨折			なし	—	32年	配偶者の死亡
9	70代	女性	要介護1	右大腿骨頸部骨折後廃用症候群 陳旧性心筋梗塞			なし	—	30年以上	離婚
10	70代	女性	要介護2	慢性閉塞性肺疾患			あり	近隣	40年以上	離婚

録を作成した。インタビューに先立ち、事例ごとに外出ニーズ、外出ニーズの充足できない理由と充足のための要望を整理した情報を共有した。インタビュー内容は、外出ニーズの確認、本人の強み、支援方針、支援内容、社会資源（内的資源としての本人、非専門職ごと、専門職ごと）の活用であった。

4. データ分析

1) 要介護高齢者

分析方法は、作成された逐語録から、調査項目（外出ニーズ、充足できない理由、充足のための要望）ごとに回答内容を原文で抜き出し、原文の意味内容が変化しないようキーセンテンス化し、全事例分集めたキーセンテンスから類似した内容をまとめサブカテゴリー化し、さらにサブカテゴリーの類似した内容をまとめカテゴリー化した。

外出ニーズの分析については、上記同様、外出ニーズをサブカテゴリー化したあと、つながりの対象と目的のそれぞれの項目毎にサブカテゴリーの類似した内容をまとめカテゴリー化した。

2) 高齢者ケアの専門家

分析の視点は、本人を含めた社会資源ごとの役割であった。分析方法は、討議内容の記録から事例ごとに外出ニーズを充足するための支援についてキーセンテンス化した。その後、全事例のキーセンテンス化された支援内容を集め、活用が検討された社会資源を供給主体の種類ごとに集め、役割で分類し、内容表示した。

5. 倫理的配慮

研究協力者に対し、研究の主旨を文書と口頭で説明し、

同意を得た。要介護高齢者への説明を行う際には、ケア担当者に同行を依頼し、十分配慮が行える環境で説明を行った。研究への参加は自由意志であり、参加・協力の有無によって不利益を被ることがないこと、情報は本研究以外の目的で使用せず、プライバシーを遵守することを約束し同意を得た。

なお、本研究は沖縄県立看護大学研究倫理審査委員会（承認番号：10006）の承認を得て実施した。

IV. 結 果

1. 関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズ(表2)

関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズは、全ての事例で表出され、9つのサブカテゴリーに整理された。文中には、キーセンテンスを「」、サブカテゴリーを《》、カテゴリーを【】、で示した。

表2のサブカテゴリーから導かれた外出ニーズの対象には、家族・親族、友人の他に、他界した家族・親族、他界した友人があった。

外出ニーズの目的には、【つながりを確かめたい】、【つながりを楽しみたい】、【つながりによる役割を果たしたい】が抽出された。

【つながりを確かめたい】は、《遠方の家族や親族に会いたい》、《懐かしい友人や知人に会いたい》外出ニーズがあった。【つながりを楽しみたい】は、《家族や親族と出かけて楽しみたい》、《なじみの友人と出かけて楽しみたい》外出ニーズがあった。【つながりによる役割を果たしたい】は、すべての対象にみられ、《家族に伝承したい》、《家族や親族を見舞いたい》、《先祖の仏壇に手を合わせたい》、《友人の役に立ちたい》、《他界した友人に礼を尽くしたい》があった。以下に例を示す。

表 2 関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズ

カテゴリー	サブカテゴリー	事例	キーセンテンス
【つながり確かめたい】	《遠方の家族や親族に会いたい》	1	「県外で結婚している娘や弟に会いたい」
		3	「実家にいる兄弟に会いたい」
		4	「足腰がすっかりしてれば、県外で暮らしている娘や孫、兄弟に会いに出かけたくなることがある」
		6	「故郷を忘れたくないので、誰かの支援を受けて実家や親戚まわりをしたい」
		8	「皆年をとってきたので、行けるうちに島外（那覇）にいる姉に会いに行きたい」
		2	「三羽ガラスと言われていた高校時代の親友にご無沙汰しているので会いたい」
		3	「ご無沙汰しているが、故郷にいる友達と遊んでみたい」
		9	「ボリビアにいる初恋の人（幼なじみの兄）に会いに行きたい」
		10	「正月や旧盆になると幼なじみに会いに行きたくない」
		2	「孫と一緒にディズニーランドに行きに行っていたので、行ったことのない孫を連れていきたい」
【つながりを楽しみたい】	《家族や親族と出かけて楽しみたい》	4	「月1回の外来受診時に従姉と食事をすることを続けたい」
		2	「もう一度着物を着て、ホテルで友達との食事会に参加したい」
		5	「皆年をとると他人のことはできないので若い人に手伝ってもらい、もう一度定期的にモアイ仲間13人で楽しみたい」
		8	「皆年をとってきたので、行けるうちに島外（那覇）にいる琴の先生や仲間に会いに行きたい」
		9	「幼なじみに会いに行きたい」
		1	「入院している兄のお見舞いに行きたい」
		3	「面会に行ったとき、夫は私のことを知っているように思えたので、従妹に頼んで夫に会いに行きたい」
		2	「孫または息子と東京での思い出の場所に出かけ若いころの私のことを語りたい」
		1	「生まれ島に行き、両親の墓参りをしたい」
		3	「実家に行ったら仏壇（親）に手を合わせたい」
【つながりによる役割を果たしたい】	《「家族や親族の」仏壇に手を合わせたい》	7	「仏壇行事に自分の足で行きたい」
		8	「夫の仏壇行事はトラブルのあった親戚がやっているので行けないが行きたい」
		9	「実家の仏壇に手を合わせに行きたい」
		2	「ボランティアや仕事の経験を生かし、デイケアで仲間の役に立ちたい」
		7	「60年来の付き合いで良く世話になった部落の友人が体調を崩しているようなので会いに行きたい」
		10	「亡くなった仲の良い友人の葬式に行けなかったので、線香をあげに行きたい」

〈事例6〉

離婚後は妻子との関わりはなく疎遠、またギャンブルにより親戚との関係が崩れ、要介護状態になる前から現在まで親戚付き合いは疎遠になっていた。しかし、大腸癌で余命を宣告され、親戚が受け入れるかは不明だが、体力のあるうちに「故郷を忘れたくないので、誰かの支援を受けて実家や親戚回りをしたい」と《遠方の家族や親族に会い(たい)》、【つながりを確かめたい】と外出ニーズを表出していた。

〈事例2〉

元気な頃は、友人と遠方までドライブしたり、おしゃれを楽しむためにデパートに頻繁に出かけていた。要介護状態になり、一人での外出が難しくなったが、「もう一度着物を着て、ホテルで友達との食事会に参加したい」と《なじみの友人と出かけて(楽しみたい)》【つながりを楽しみたい】と語っていた。また、要介護状態になったことで通い始めたデイケアで新たにできたおしゃべりを楽しむ友人(活動仲間)ができた。「これまで培ったボランティアや仕事の経験を活かし、デイケアで仲間の役に立ちたい」と《友人の役に立ち(たい)》【つながりによる役割を果たしたい】と外出ニーズを表出していた。

2. 外出ニーズの充足できない理由と充足のための要望(図1)

外出ニーズが充足できない理由は、12のサブカテゴリーから【身体的な変化による活動減少】、【人的・物的環境の脆弱さ】、【個別のつながりの限界】の3カテゴリーが抽出され、外出ニーズの充足のための要望は、11のサブカテゴリーから【外出実現のための具体的支援をしてほしい】、【つながりへの思いを理解してほしい】、【つ

ながる方法を一緒に考えてほしい】の3カテゴリーが抽出された。理由と要望のカテゴリーの関係は、事例によって様々な組み合わせのパターンがあり、事例毎で個別的なものであった。以下に例を示す。

〈事例10〉

事例10は「亡くなった仲の良い友人の葬式に行けなかったので、(仏壇が引き取られた場所がわかれば)線香をあげに行きたい」外出ニーズが充足できない理由として「在宅酸素をしてからひとりで遠くへ出かけられない」【身体的変化による活動減少】、「車を持っている若い友人がいるが、仕事で忙しいので一緒に出かけるようお願いできない」と【人的・物的環境の脆弱さ】以外に、「買物を届けてくれる友人にも相談しているが、仏壇が引き取られた家の場所がわからない」という【個別のつながりの限界】があった。

充足のための要望としては、「友人の居場所がわかったとしても、(車を持っている若い友人は)仕事で忙しいと思うので遠慮してしまう」【つながりへの思いを理解してほしい】や「友人の仏壇がある場所がわかれば、(顔馴染みの)商店の店主と一緒に出かけられる」ので【つな

3. 外出ニーズを充足するための外出支援

1) 外出ニーズを充足するための社会資源と役割(表3)

外出ニーズを充足するための外出支援の社会資源には、内的資源としての要介護高齢者、外的資源としての非専門職(家族・親族と友人・知人)と専門職(生活保護ワーカー、移送介護やデイケアの介護職などの福祉職、

図1 外出ニーズの充足できない理由と充足のための要望

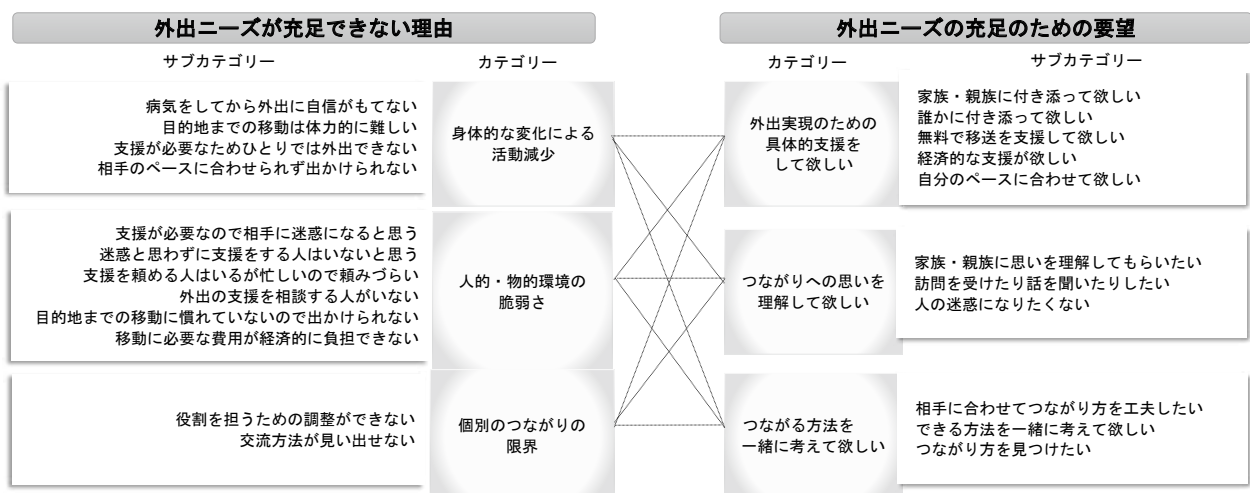


表 3 外出ニーズを充足するための社会資源と役割

社会資源			役 割	キーセンテンス
内的資源	当事者	本人	つながりの糸口探し	故郷への訪問するついでに幼なじみの情報を探す
			具体策の検討	趣味の恩師や仲間達とも会えるようなタイミングや、その方法を一緒に考える
			外出実現に向けた協働	モアイのお茶お菓子の準備は、本人と息子が一緒に買い物に出かける時に頼めば調達できる
			外出実現のための体力づくり	多様な外出ニーズを目標とした体力づくりをリハビリの計画に活かす
外的資源	非専門職	家族・親族	つながりのための情報提供	会いたい友人を特定するために本人や従姉妹から情報を得る
			具体策の検討	送迎も含めモアイの準備は息子が相談にのる
			外出実現に向けた協働	実家の訪問には兄の役割（入り口まで来てもらう）も検討する
		友人・知人	つながりのための情報提供	社会福祉協議会は地域リーダーの協力を得て外出支援者を特定し本人とつなぐ
			具体策の検討	友人に線香をあげるための外出は、本人とケアマネージャーが元民生委員を加えて、場所や方法を相談する
			外出実現に向けた協働	モアイへの連絡は隣近所の友人を活用する
	専門職	看護職	つながりの糸口探し	病気の友人の情報を知ることについては、友人の許可を得た後に友人の病状を本人へ伝える
			具体策の検討	身体機能の低下と介護力の変化は、すぐ改善する予定であり、落ち着き次第モアイをひらくための支援を行う
			外出実現に向けたニーズの共有	複数のケア担当者で外出ニーズを共有する
			外出実現に向けた協働	健康上の課題については、主治医やデイ看護師と調整する
			外出意欲へのアプローチ	2つの外出ニーズについては、障害受容と関係しており、障害受容への支援を継続的に行う
			外出ニーズを活用したリハビリ支援	夫のお見舞いをリハビリと位置づけ定期的な外出支援を継続する

ケアマネージャーや訪問看護師などの看護職、診療所医師）があった。

外出ニーズを充足するための『具体策の検討』とその『外出実現に向けた協働』の役割は、本人を含め家族・親族、友人・知人、看護職に共通していた。本人と看護職に共通していた役割は、『つながりの糸口探し』であった。本人に特化した役割は、『外出実現のための体力づくり』、看護職に特化した役割は、『外出実現に向けたニーズ共有』、『外出意欲へのアプローチ』、『外出ニーズを活用したリハビリ支援』があった。

2) 外出ニーズを充足するための支援の検討（図2）

以下に、外出ニーズを充足するための支援の検討について事例で示す。

〈事例3〉

事例3の外出ニーズとして「面会に行ったとき、夫は私の事を知っているように思えたので、夫に会いに行きたい」「実家に行って仏壇（親）に手を合わせたい」を確認した。フォーカスグループインタビューで本人の強みとして、「夫の入院している病院は近くにある」、「リ

ハビリの意欲はないが夫の面会時には車いすを自走していた」ことを把握しているので、「夫との面会は数少ないリハビリの機会と捉えられる」と訪問看護師が語っていた。その強みを活かした支援方針は、「肥満で減量の必要性はあっても、運動をしようとししない。しかし、夫の面会目的なら身体を動かすため、外出支援を通してリハビリの動機づけを行う」とした。

援助内容は、「会いたい友人の居場所を特定するために本人や従妹から情報を得（る）」で、『つながりの糸口探し』を行い、「実家への外出の実現に向けた調整を本人と一緒に（う）」い『具体策の検討』し、「実家の訪問には兄の役割（入り口まできてもらう）も検討する」ことで社会資源を活用した『外出実現に向けた協働』により、「実家への外出ニーズをリハビリの動機付けにする」や「夫の見舞いをリハビリ目的と位置づけ定期的な外出支援を継続する」という『外出ニーズを活用したリハビリ支援』に活かしていた。それぞれの支援内容に活用する社会資源として、本人・兄・従妹・訪問看護師が検討された。

図2 事例3における外出ニーズを充足するための支援の検討

外出ニーズ①:「面会に行ったとき、夫は私の事を 知っているように思えたので、夫に会いに行きたい」		外出ニーズ②:「実家に行って仏壇（親）に手を合 わせたい」 外出ニーズ③:「実家にいる兄弟に会いたい」		外出ニーズ④:「ご無沙汰しているが、故郷にいる 友達と遊んでみたい」			
ニーズの明確化		本人の強み		支援方針		支援内容	
外出ニーズを充足するための専門職の検討	これからも支援 してくれる従妹と 調整して夫の面会に 行けるようにした い。また、従妹の支援 を受けて実家の兄に 会ったり仏壇（親）に 手を合わせたい。 ついでに、実家の 近くに住む友人にも 会えるようにした い。		本人	肥満で減量の必要性は あっても運動しようと しない。しかし、夫の 面会目的なら身体を 動かすため、外出支援 を通してリハビリの 動機づけを行う。		①会いたい友人を特定するために 本人や従妹から情報を得る。 《つながりの糸口探し》 ②実家への外出の実現に向けた 調整を本人と一緒に行う。 《具体策の検討》 ③実家の訪問には兄の役割 （入り口まできてもらう）も検討 する。 《外出実現に向けた協働》 ④実家への外出ニーズをリハビリ の動機付けにする。 ⑤夫の面会をリハビリ目的と位置 づけ定期的な外出支援を継続 する。 《外出ニーズを活用した リハビリ支援》	
			家族				
			友人				
			専門職				

V. 考察

1. 関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズ

要介護高齢者は、全事例において関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズを表出していた。外出ニーズの対象は、【家族・親族】、【友人】、【他界した家族・親族】、【他界した友人】であり、他界した者も含まれており、外出ニーズの目的は、途絶えた【つながりを確かめ(たい)】つつ、【つながりを楽しみ(たい)】、【つながりによる役割を果たしたい】であった。全てのつながりの対象に【つながりによる役割を果たしたい】外出ニーズの目的がみられた。

今回、外出ニーズへの家族の影響を最小限にするため一人暮らしの要介護高齢者を対象としたが、同居家族の有無に関わらず、要介護状態による外出の諦めから潜在化しやすいことが報告されている(金, 2003)。また、外出ニーズの対象は、他界した者を含む過去から現在までの関係他者が含まれており、家族と同居している状況であってもニーズの充足は、容易ではないことが考えられる。このことから、関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズは、一人暮らしに限らず充足されにくいニーズと考えられる。

サクセスフルエイジングの基本理論の一つである継続性理論では、「パーソナリティを維持しながら活動を調整することで適応する」と述べ、これまで培った経験や社会関係を活かすことが重要であり、そのために当事者の主観に着目することの必要性を強調している(佃, 2008)。外出ニーズを表出させることは、要介護高齢者本人が、どのような他者とどのようにつながりたいのか、すなわち自身の人生においてどのような関係他者とのつ

ながりの中で今後の暮らしを創りあげたいのかを意識化させ、適応の一助となることが示唆された。このように、関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズは、人生の統合期における発達課題(福富, 1997)である新たな役割の再方向づけをしながら人生を受容するプロセスの一助になると示唆が得られた。

つまり、外出支援を関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズで捉えることは、老年期の発達課題に適応し、よりよく老いを生きるための環境づくりへの新たな支援の展開が期待できると考えられた。

2. 外出ニーズの充足のための課題

要介護高齢者は、外出ニーズが充足できない理由として【人的・物的環境の脆弱さ】、【身体的な変化による活動減少】に加えて、《役割を担うための調整ができない》や《(連絡先が不明で)交流方法が見いだせない》といった【個別のつながりの限界】を挙げていた。そして、その充足のための要望には、【外出実現のための具体的支援をして欲しい】に加えて、「友人に会えなくても、せめて病状を把握し、友人のことを思いたい」という【つながりへの思いを理解して欲しい】、「模合い仲間と一緒に集まれる方法を一緒に相談したい」という【つながる方法を一緒に考えて欲しい】があった。

佐藤(2016)は、「援助とは、援助を求める当事者がその課題を解決しようとする方向性を持つことを助けること」と述べ、当事者が主体として方向性を持つためのケアの第一歩として「語り」を聞く他者の存在の重要性を説明している。それは、他者にわかってほしいという懸命に語る努力が、自己理解とともに他者にわかってもらえた感、

すなわち「共に在る」共存在の感覚をもたらし、その感覚が顕在化することで、当事者は次のステップとして、その事態の意味を再考し、今後どうしていきたいのかを自ら決定していく過程に進めるとしている（佐藤，2016）。

要介護高齢者が抱く「会いたい人に会いに出かけることができない」というどうしようもない事態は変えることが困難だとしても、その事態への悲痛な思いを他者が受け止め理解することは、当事者がその事態の中で、今後どうしていきたいのかという希望を見出すことにつながると考えられる。ボーヴォワール（1972）が人生の最期の15年を生きる屍でしかないと形容した事態は、将来の希望がなく、自己決定する選択肢を持たず、誰にも存在を期待されない老年期の姿を指摘したものである。要介護状態により身体が自由がきかないことや制度の限界から活動の制限を余儀なくされ、諦めの気持ちから希望が見出しにくい状況に陥ることは高齢者ケアの課題と考える。そのため、要介護高齢者だからこそ、本人の希望の実現に向かい、自ら持てる力を発揮しながら行動していけるような環境をつくるため、看護職として、要介護高齢者の「語り」に耳を傾けることは必要な支援だと考える。

これらのことから、看護職が役割を果たすためには、外出に向けて具体的支援を提供する前に、要介護高齢者を取り巻く関係他者とのつながりをその人の持つ人的資源とし、つながりの対象と目的を意味づけ、つながりたい思いを共有することが支援の始まりであると考えられた。

3. 外出ニーズを要介護高齢者の主体性に活かす看護職の役割（図3）

外出ニーズを充足するための支援の検討より導かれた看護職の役割として、外出ニーズを表出させ、つながりへの思いを共有し、本人とともに『つながりの糸口探し』をしつつ、『具体策を検討』し、『外出実現に向けたニ

ーズの共有』により、『外出実現に向けた協働』で外出支援をすることは、ひいては、『外出意欲へのアプローチ』や『外出ニーズを活用したリハビリ支援』という日常生活における健康支援へ波及していくことが示唆された。

つながりへの思いは主体性を発揮し、原動力となる可能性があることから、セルフケア促進に活かせることが示唆された。

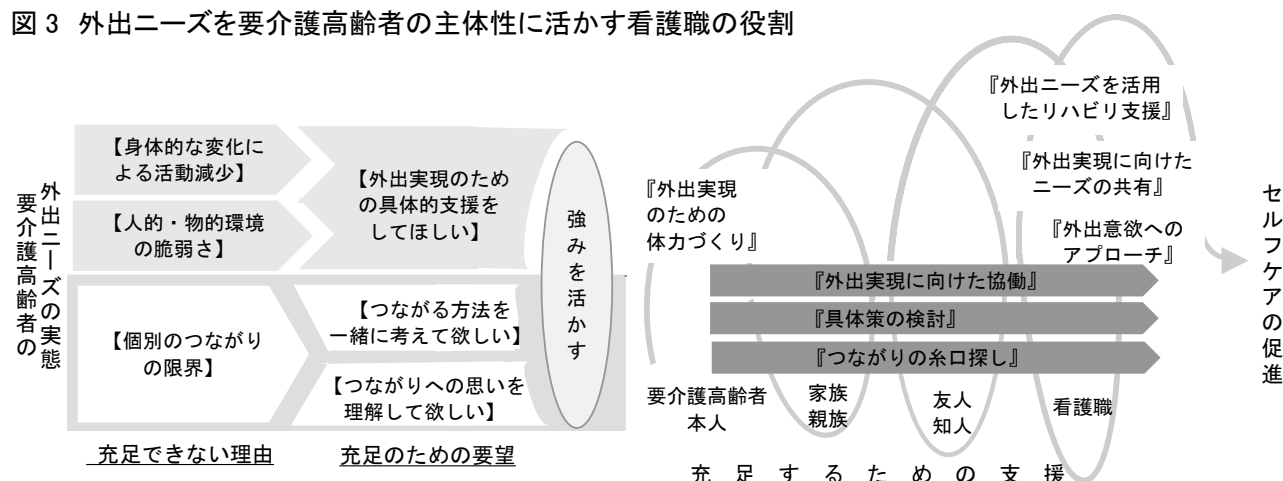
要介護高齢者の外出支援は、外出ニーズを有する要介護高齢者の強みを内的資源と捉え、支援の受け手としてだけでなく、担い手としての可能性を探りつつ、その強みをセルフケア能力の促進につなげることが重要と考えられた。

看護実践の先行研究（大湾，2008；坂東，2008；美底，2010）では、看護職が多機能性を発揮した役割拡大と協働により、公的サービスの枠を超えて新たなケアを誕生させ、地域の実情に合わせた課題解決を実践している報告があった。

少子高齢化の進展と社会保障制度の持続可能性が懸念される現代、急務とされている地域包括ケアシステムでは、これまでの病院完結型の生活から切り離された形での医療ではなく、生活の中に医療を取り込み、地域で支える支援体制づくりが目指されており、生活を中心に支援を組み立てていくことがますます求められる。中板（2014）は、自助、互助、公助を統合する看護職の役割として、専門分化した縦割りの役割にとらわれず、ひとりの生命の質を支える仕組みを看護の視点で築きあげる役割の重要性を述べている。生活の連続性の中で健康支援するためには、専門職が捉えた必要性から組み立てられた支援ではなく、当事者の捉えるニーズを、社会資源を活用しながら、協働で課題解決を導く支援を組み立てることが、主体性をセルフケア促進に活かす上で必要である。

つまり、外出ニーズを要介護高齢者の主体性に活かす看護職の役割として、生活者として対象を捉え、外出ニ

図3 外出ニーズを要介護高齢者の主体性に活かす看護職の役割



ズを把握し、本人を含めた人的資源を統合し、看護職の役割拡大と協働により、生活の実情に合わせて支え合う支援を柔軟に組み立てる能力が求められる。

4. 本研究の限界

本研究の限界として、一つめは、外出ニーズは、潜在化しているものは含まれていないこと、二つめは、ニーズの表出は調査者の面接技術に影響されること、三つめは、対象の要介護度が軽度と偏りがあったので、要介護高齢者の全体を扱ったとはいえないこと、四つめは、ケア担当者が訪問看護師、ケアマネージャーに限定されていたため、看護職全体の役割を捉えたとは言えないことである。

今後の課題は、要介護高齢者の関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズを充足する支援について、要介護高齢者本人、家族、ケア担当者との協働による実践を試み、関係他者とのつながりを維持する支援方法を提案することである。

VI. 結 論

要介護高齢者の関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズと充足できない理由、充足のための要望を把握し、充足するための支援を検討した結果、以下のようなことが明らかになった。

1. 関係他者とのつながりを目的とした外出ニーズは、全事例に表出されており、外出ニーズの対象は、他界した者を含めた【家族・親族】【友人】であり、外出ニーズの目的は、途絶えた【つながり確かめ(たい)】つつ、【つながりを楽しみ(たい)】、【つながりによる役割を果たしたい】であった。
2. 外出ニーズが充足できない理由は【身体的な変化による活動減少】、【人的・物的環境の脆弱さ】に加え、【個別のつながりの限界】が導かれ、その充足のための要望として、【外出実現のための具体的支援をして欲しい】以外に、【つながりへの思いを理解して欲しい】、【つながる方法を一緒に考えて欲しい】が含まれていた。
3. 外出ニーズを充足するための外出支援の社会資源には、内的資源としての要介護高齢者、外的資源としての非専門職(家族・親族と友人・知人)と専門職(福祉職、看護職、医師)があった。本人に特化した役割として、「外出実現のための体力づくり」があり、看護職の役割として、本人とともに『つながりの糸口探し』をしつつ、『具体策を検討』し、『外出実現に向けたニーズの共有』により、『外出実現に向けた協働』で外出支援をすることで、『外出意欲へのアプローチ』や『外出ニーズを活用したリハビリ支援』という健康づくりへも波及していた。

謝辞

本研究を実施するにあたり、ご協力頂きました研究協力者の皆様に心より感謝申し上げます。本論文は、筆頭

者の2011年度沖縄県立看護大学大学院保健看護研究科の修士論文を加筆修正したものである。また、本研究における利益相反はない。

【文献】

- 坂東留美. (2008). 小離島在宅高齢者の入院支援における看護師の役割と機能, 沖縄県立看護大学大学院修士論文.
- 藤井直人, 中村紀雄, 土屋智久, 土屋 辰夫. (2010). 要介護高齢者の4輪歩行車を使用した外出. 神奈川県総合リハビリテーションセンター紀要, (35), 35-39.
- 林真理子, 大塚龍介, 石島由香里, 池田貴英. (2013). 慢性疼痛を有する介護高齢者の行動とマシントレーニングとの関連. パワーリハビリテーション, (12), 37-40.
- 今村晴彦, 園田紫乃, 金子郁容. (2013). コミュニティのちから. 初版. 慶応義塾大学出版会株式会社.
- John W. Rowe, Robert L. Kahn, (1998/2000). 関根一彦(訳), 年齢の嘘. 日経BP社.
- 加藤伯彦, 大西丈二, 生田京子, 山下哲郎. (2008). 在宅要介護高齢者の住宅内での行動範囲と身体機能評価との関連について. 日本医療・病院管理学会誌, 45 (4), 263-275.
- 金憲経, 胡秀英, 吉田英世, 湯川晴美他. (2008). 介護保険制度における後期高齢要支援者の生活機能の特徴. 日本公衆衛生雑誌, 50 (5), 446-455.
- Lynda Gratton, Andrew Scott, (2016/2016). 池村千秋(訳), LIFT SHIFT. 東洋経済新報社.
- 正木治恵, 真田弘美(編). (2021). 第Ⅲ章 老年看護の対象となる人々の特徴. 看護学テキストNiCE老年看護学概論(pp91-94). 第3版. 南江堂.
- 美底恭子. (2010). 離島診療所における高齢者の内服自己管理への看護師の支援一波照間島での試み一, 沖縄県立看護大学大学院修士論文.
- 三浦研, 川越雅弘, 孔相権. (2008). 要支援・軽度要介護者の生活機能の差異とその特徴. 生活科学研究誌, 6, 95-104.
- 望月秀樹, 大嶋伸雄, 繁田雅弘. (2012). 運動器の機能向上プログラム実施後の要支援高齢者における心理的变化の分析 マズローの基本的欲求を基盤とした調査より. 老年精神医学雑誌, 23 (3), 334-345.
- 望月美栄子, 山崎喜比古, 八巻知香子. (2012). 在宅要介護高齢者にとっての日常生活における車いす利用の意味. 民族衛生, 78 (6), 127-138.
- 森井琢磨. (2018). 通所介護サービスを利用している高齢者の閉じこもり要因と対策 S県O市において. 自立支援介護・パワーリハ学, 12 (2), 100-107.
- 中板育美. (2014). 高齢者のメンタルヘルスを保つ—自助、互助、公助を統合する保健師の役割の重要性

- 一, 老年精神医学雑誌, 25(3), 273-279.
- 永田千鶴, 松本 佳代. (2017). 電動カートを活用した高齢者のグループ活動の実践と評価. 老年看護学, 21(2), 75-82.
- Newman, Barbara M, Newman, Philip R. (1984/1997). 福富護 (訳), 新版生涯人間発達心理学. 初版. (pp451-478). 川島書店.
- 大湾明美, 坂東瑠美, 佐久川政吉, 呉地祥友里他. (2008). 小離島における「在宅死」の実現要因から探る看護職者の役割機能—南大東島の在宅ターミナルケアの支援者たちの支援内容から—, 沖縄県立看護大学紀要 (9), 11-19.
- Simone de Beauvoir. (1970/1990). 朝吹三吉 (訳), 老い 上巻. 初版. 人文書院.
- 齋藤 泰子, 川南 公代. (2017). 高齢者の社会的孤立と健康に関する文献研究. 武蔵野大学看護学研究所紀要, (11), 21-29.
- 佐々木修一, 埜村彩, 小幡彰一. (2015). 転倒恐怖感の改善により生活範囲が拡大した在宅要支援高齢者の一事例. 京都在宅リハビリテーション研究会誌, (9), 29-34.
- 清水一輝. (2019). 障害を有する高齢者はどのように生活圏を拡大するのか 複線径路・等至性アプローチ (TEA) による分析. 愛知医療学院短期大学紀要, (10), 53-60.
- 佐藤泰子. (2016). 苦しみと緩和の臨床人間学—聴くこと, 語ることの本当の意味—. 初版. 晃洋書房.
- 佐藤 和佳子. (2019). 【LUTSとフレイル・サルコペニア】フレイル・サルコペニアと排尿ケア. 日本排尿機能学会誌, 29(2), 359-363.
- 高橋 将也. (2017). デイサービス利用者の生活空間と心理特性の関連について. 岩手理学療法学, (9), 19-23.
- 佃亜樹. (2017). 「サクセスフルエイジング」の再定式化への一考察—ジェロトランセンデンス理論の到達点と課題—, 立命館産業社会論集, 43(4), 133-154.
- 横塚美恵子, 二戸映子, 鈴木鏡子, 安積春美. (2010). 介護保険制度を利用した住宅改修による生活機能への影響. 理学療法科学, 25(6), 855-859.
- 米田香, 安田直史, 村田伸. (2012). 通所リハビリテーション利用者の外出行動の有無と身体機能に関する前向き研究. ヘルスプロモーション理学療法研究, 2(1), 33-36.
- 吉丸博志, 石川和幸, 神近成美. (2008). 当事業所における行動変容への取り組み. パワーリハビリテーション, (7), 124-125.

Support and Needs for Elderly People in Need of Long-term Care during Outings to enhance Relationships with Concerned Individuals

Yuriko Mitsukude¹⁾, Yuki Taba¹⁾, Hatsuyo Yamaguchi¹⁾, Yukari Sunagawa¹⁾, Akemi Ohwan¹⁾,

Abstract

Purpose: This study aims to understand what needs and support the elderly, who are in long-term care, require when attempting to engage in social activities or outings. Specifically, outings that aim to enhance the relationships with concerned individuals, this study further examines supportive actions that can fulfill these needs.

Methods: Ten semi-structured survey interviews were conducted with elderly participants requiring long-term care. The study examined supportive actions that may fulfill such outing needs by taking advantage of each elderly's strengths through focus group interviews with their caregivers and geriatric nursing teachers.

Results: Outing needs identified by the elderly included the desire to confirm the relation, enjoy the relation, fulfill the role through the relation. The reasons suggested for the elderly's inability to fulfill these needs were identified as reduced participation in activities due to physical changes, vulnerable personal and physical environment, and limitations in individual relations. Despite these restrictions, there were demands identified which may help to fulfill these needs during outings. These included the demand to receive specific supports that enable the outing, to be understood and the longing for relationships, and to have someone who would collaborate with them to realize the relation. Social resources available to support the outing can be assigned to one of two resource categories. Internal resources include elements relating to the elderly individual's long-term care, external resources like assistance from non-professionals (family members, relatives, friends, and acquaintances), and professionals (welfare specialists, nurses, and doctors). The roles of nurses were not only limited to "examine specific measures" but also included "look for clues leading to relation", "share the needs to realize an outing", "collaborate towards the realization of the outing", "approach to boost outing motivations", and "support rehabilitation by taking advantages of the outing needs".

Conclusions: The role of nurses in outing support identified through this study was to "look for clues leading to relation" together with the elderly while simultaneously "examine specific measures" and, by "sharing the needs to realize outing," provide support through "collaboration towards the realization of outing" to "approach to boost outing motivations" and "support rehabilitation by taking advantages of the outing needs".

Key words: Elderly requiring long-term care, Relations with concerned individuals, outing need, outing support

1) Okinawa Prefectural College of Nursing